
とらんじすた・がーる

邊川 弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とらんじすた・がーる

【Nコード】

N4780N

【作者名】

邊川 弘

【あらすじ】

周りを山に囲まれ時代の流れに忘れられた田舎。

携帯電話の普及率がいまほどではなかったそんな時代。

突如やってきた二人の転校生。

主人公である”上坂勇”は、そのうちの一人”朝生歩”に一目ぼれしてしまう。

なんとかお近づきになろうと携帯電話での告白計画を立てるが……。

二人の転校生

何のことはない。

俺が彼女と特別接点があったわけじゃない。

きっかけはこの手にある真新しい携帯電話。

今時だれでも持っているものだが、こんな小さな村に携帯電話など必要がない、急用であれば少し足を使えば目的の人物とコンタクトを取れる事だろう。さらに言うならこんな田舎じゃあ山に囲まれその電波状況は最悪だ。

だから、今までは必要なかった。

あの夏の終わりまでは…………。

「ほら！静かにせんかい！」

バンバンバン。

教師は指し棒で教卓を数度打ちつけ、騒がしい教室の収集図る。

だが、教室は一種のカオスを作り出しており、その音は生徒達の騒がしさに飲み込まれる形となる。

まあ、無理もない。

こんな田舎に転校生がやってくるというのだから、大事件になる。

教室を見回せば知らない顔など一つもない、それどころか全員子供の頃からよく知る顔ばかりだ。

その中に見知らぬ顔が突如加わり、しかもそれが東京の人間ともなれば話はさらに加速する。

俺達の年代にとって”東京”というところは憧れの的、誰もがハイカラで時代の最先端という認識があるのだ。

正直、僕も興味がないといえば嘘だった。

「まったく、おまえらときたら。少々騒がしいがこのままじゃあ埒があかんわな、二人ともはいつてくれ」

教師は半ば投げやりな口調で廊下で待たされていた人物達を招き入れる。

ゴトカタゴトカタゴトツ。

木造校舎のガタがきた扉が、はめ込まれたすり板ガラスを震わせながらゆつくりと開く。

「おおおおおお」

男子連中の感嘆の声に迎えられたのは二人の少女だった。

一人は流れるようなロングヘア、顔には満面の笑みを湛え元気印と言った表現が似合いそうな美少女だ。

もう一人は少し小柄なボブカット、メガネの反射で表情は見えないが根暗な雰囲気をもし出している。

二人とも転校してきたばかりなので、制服も学校指定のセーラー服ではなく、東京の頃のブレザータイプを着用している。普段見慣れていないこともあるだろうが、俺達には彼女達がより一層輝いて見えたことには違いない。

「よし、それじゃあ軽く自己紹介してもらおうか？じゃあ、朝生から」

「はい」

切れの良い返事と共にロングヘアの少女は教壇に上がる。

颯爽といった表現が適当だろうか、ふわっと風に踊るサラサラな髪はシャンプーのCMをみているかのようだ。

しかし、なんて綺麗な女性なのだろうか。

なんといってもその整った顔立ち、触らずとも分かるスベスベな肌。彼女が通った後の、ほのかな残り香すら眼に見えるようである。

黒板の前に立った少女は赤のチョークを手に取ると高々と振り上げたその腕で黒板を叩きつける。

カツカツッ！ ボキッ！ カツッ！ ボキ！ カツッ！

あまりに元気よく打ち付けられたチョークが何度か折れたが、無事自分の名前を書き上げた少女は満足そうに頷くと、くると生徒側に向きを変える。

「えーっと、東京の奏上高校から転校してきました、朝生 歩あそつあゆみです！趣味はスポーツです！前の学校ではバスケット部に所属していましたあ。えーと、こちらの暮らしにはまだ慣れてないのでよろしくお願ひします！」

ニコッ！

明るく元気な自己紹介と共に放たれる極上の笑顔がこれ以上ないくらいに見事に決まる。

か、完璧だ。

感嘆が漏れるほどの自己紹介。

あえて含まれる情報を少なくし、ミステリアスな一面を残しつつも明るく振舞うことで聞き手の心に田んぼ仕事を終えた婆さんの長靴のごとき土足で上がりこむ。

今の自己紹介で撃沈した男子生徒がひい、ふう、みい……いっぱい。流石は東京の女子高生、コレではこの俺様もときめいてしまうのも無理はない。

普段聞こえるはずのない自分の胸の鼓動がドクンツドクンツと身体の下で響いているのが分かる。

ま、まさか、これが一目惚れというやつなのだろうか。

——決めた。

俺はこの娘と仲良くなるぞ…。

なんとしてもこの娘のハートを射止めてみせる！！

「じゃあ、次。大野」

「…はい」

注目の二人目は覇気のない声で答えると教壇に上がる……が教壇から頭だけがひよこひよこ動く。

あまりに小柄なため頭部しか見えないのだ。

やばい、この位置からだとし首にしか見えないぞ！！

しかし、彼女はチョークを手にしたものの黒板を見上げるだけで動かない。

否、動けないのだ。

理由は誰の目からでも明らか、そう身長が足りずに自分の名前を書けないでいる。

「うっ。うっ」

ついに呻き声が彼女から漏れ始めた。

それを見かねた教師がズビシツと最前列の一名を指名する。

「おい、本田。お前の椅子を貸してやれ」

「え」

突然の指名に驚く本田君。正直子供の頃からクラスは一緒だが存在感のない人物だ。

なぜなら、いま指名されて思い出したぐらいだから…。

「い、椅子取られたら座れないんですけ……」

「立ってる」

「……は、はい」

職権濫用によって強制的に貸し出された本田椅子が、本田君本人の手によって彼女の前に設置される。

「ど、どうぞ」

「……ありがとう」

彼女は感謝を述べると本田椅子に登る。

あ、なんか本田君うれしそうだな、おい。

ようやく平均身長を手に入れた彼女は静かに自分の名前を黒板に書き付ける。

えーと、大野…あか…り？

「…大野あかりです。どうぞよろしく」

ペコリ。

一度お辞儀すると彼女は本田椅子から離脱する。

しゅ、終了？

ミステリアスにもほどがないか？

しかし、改めて聞くと見た目によらずハスキーな声だ。相変わらずメガネの反射で表情はつかめないけど無表情って感じだな。

しかし、なんであんなにメガネ光っているのだろうか……。

「よし、そういうわけだ。これから仲良くしてやってくれ。朝礼
終わり」

ガラララピシャン。

教師が去つたのを確認した生徒一同。

ここからの行動は王道的なものが存在し、俺たちもその例外ではない。

ファーストフェイズ：全員起立。

セカンドフェイズ：速やかに転校生の包囲。男子は我先に、女子はその男子を罵りつつ小隊編成で。

サードフェイズ：男子は個人情報引き出し、女子は共通点の模索。転校生イベントのお決まりというか、日本人の悲しい性というか……。

ってこんな落ち着いてる場合じゃない！俺も朝生さんに強烈な第一印象を刷り込まねば！

慌てて席を立ち、いざ出陣！

その時、俺の肩を驚掴む一本の腕。

「やあやあ、上坂勇^{かみさか ゆう}くん。君も朝生さん狙いかあ？」

「声の方へ振り向くとそこには友人（仮）の鰐島^{わにじま}明人^{あきと}が不景気そうな面をして立っていた」

「おい、声に出てるぞ。しかも（仮）ってなんだよ。親友だろ？」

「安心しろ。声に出ているのは仕様だ。（仮）も意図して吐いた台詞だ」

「確信犯かよ。おい」

クソッ、1分1秒を争うときに沸いてでてんじゃねーよ！

お前と話してるこの時間が、俺と朝生さんのLOVEな未来に影響せんともかぎらんだぞ！

そういえばコイツは決まって邪魔なときに現れる。

コイツは家も近いこともあり昔からの腐れ縁であるが、予定があるときに限って厄介ごとを持ち込んでくるブッキング大王なのだ。

あー、徐々に強固になる包囲網。

内側からの脱出も困難だが、外側からの接触も困難になっていく。

「今度は声には出てないが、お前の気持ちに手が取るようだよ。勇」

「さすが我が親友。なればこの穢れた右手離してもらおうか」

そう言つて俺の肩にかけられた明人の手をペチペチと叩く。

「そうしてやりたいのは山々なんだが、用があるのは俺じゃない」

明人は教室の後方のドアを指し示す。

そこには去つたはずの教員こと、担任の秋山が……顔だけドアから覗かせている。

「悪いな上坂。若いことはいい事だが、お前も大人になれや。進路希望のプリント提出してないのはお前だけだぞ」

そういえばそんな物もあったような気がする。

しかし、俺たちはまだ高校1年生、進路といわれてもいまいちピンと来ないというのが現実である。

進学にしろ、就職にしろもう少し余裕を持つて曇りなき眼で見定め

……決める。

「あ、俺なんかカッコイイ」

バコッ！

いつの間にか俺の目の前に来ていた教員が出席簿で俺の頭をはたく。

「何がカッコイイんだ？ん？話の途中で妄想世界に逃げ込むのは直したほうがいいぞ」

「でも、俺まだ決められないですよ」

「それでも決めるのが大人だ。いいか、今日中に提出しろよ」

言いたいことだけ言い残すと秋山は今度こそ教室を去っていく。
なにが大人だ。

責任をもてないようなことを決めれるか、それこそ大人のすることではない。

世の中は流れる時間が速すぎるのだ。

時間にケツを叩かれ、その場しのぎで人生という道をつなげていく。
こんなことをしていれば欠陥工事に気づく暇すらありはしない。

「まったく、大人が聞いてあきれるぜ。この狭い日本、そんなに急いでどこに行くってなもんだ」

「勇、お前たまに変なこというな」

「変なものか、権力に押さえつけられて無理やり吐き出させた進路にどれほどの価値がある」

「じゃあ、勇はなんか夢でもあるのか？」

「世界征服」

「……………でっけーな」

「冗談だ。マジにするな」

「しかし、秋山先生の言うことももつともだぜ。今のお前に夢がないのならそれを探す努力は今すべきだ」

「なんかまともっぽい事いつてるなコイツ。」

「そう言われるとなんだかそんな気もしてくる。」

「夢……………か……………ん？」

「そういえばあの人の塀は……………」

「ハッ！」

「明人！ たったいま夢が出来た！ 俺の夢は、朝生さんとのラブラブ学園生活だああ」

「そっぴい残すと果敢に人ごみにダイブする俺。」

「立派な夢だよ……………まったく」

携帯電話ショッピング

キンコンカーゴーン。

微妙に壊れたチャイムが一日の終了を告げ、放課後。

結局、あの後すぐに一限がスタートし、朝生さんとの会話は出来なかった。

休み時間も女子連中に学校案内と連れまわされ、昼休みなど屋上は女の花園と化し入り込む余地もなかった……。

そして、今まさに校門を女子連中とくぐる転校生二人組み。

「あれ、心の汗で明日が見えない」

教室の窓からその様子を見て悔し涙を流す俺。

正直女子連中のガードがここまで厳しいとは予想GUYだった。

なんというか、ベルリンの壁が教室を東西に引き裂いたような……。少しでもその壁に近づくと憲兵が……

「何？　なんかよう？」

こうである。

「よう、どうやら作戦失敗のようだな。勇」

後方からの声に振り返ると諸悪の根源である明人が帰り支度を済ませ、いやらしい笑顔でこちらに歩いてくる。

どうやら悲しみに打ち拉がれている俺の姿を見てご満悦らしい。

「現れたな。元凶め」

「おいおい、そういうの八つ当たりって言つの知ってるか？」

「ふふ、誰が八つ当たりをした。確かにお前は元凶ではあるが、心が無限宇宙のように広い俺様はそんなことでは怒りはしないよ。なぜなら！」

見よ！コレこそが授業中寝ながら閃いた一世一代の作戦。

バサア！

そう、俺が取り出したのは先ほど職員室からくすねてきた朝刊の折込チラシ！！

「なんだこれ、携帯電話のチラシじゃないか」

「そのとおり！いいか、明人も知つての通りこの村は時代に忘れられた田舎だ！携帯持つてるやつなどほんの少数！ここで携帯をGETし、朝生さんと”めるとも”になり、”めーる”というもので告白しようと思うのだよ！」

「要は”ラブレター”ってことだろ。手紙じゃダメなのか？」

「あ、こいつはなににもわかつちやいない。」

「それでは地を這うゴキブリどもと変わらないじゃないか。聞いた話では東京のカップルのほとんどはこの”めーる”によつて成立しているらしい……」

「ほんとかよ……」

もちろん確かな筋からの情報だ。

月間東京マガジーン7月号掲載の”これであなたもバカップルの記事にはしつかりと書かれていた。

「そこでだ！今度の日曜日に隣町まで繰り出し、携帯電話を買つてこようと思うんだが！」

バンッ！

明人の前にチラシを叩きつけての親友とのアイコンタクト。

「買ってこいよ」

「ガッデム！目で通じろよ！親友！」

明人はこめかみを押さえながら大きくため息をつく。

「すまん、流れが見えない」

「つまりだ！ 買ひ物に付き合えと！ そう言つとるのよ！ 俺は！」

身振り手振りを交えて必死にアピールする。

正直なところ俺はどうも機械というものが苦手だ。

携帯電話どころか黒電話じゃないダイヤルプッシュ式の電話すら怪しい。

留守電の録音の仕方が分からず、一時期我が家の留守電は、

”え？ なに？ もうこれはじまつてんの？ ブツッ！”

だったのだ。

携帯電話を買うのはいいが、実際に使えるかどうか。

そもそも、携帯電話とPHS（絶版）との区別もつきそうにない。

「ほほう、残念だが勇……。俺も田舎者で携帯なんて先生が持つて
るヤツしか見たことがない」

ガン！

「しかし、三人寄ればもんじゃ焼きと言うじゃないか！ オラに力を分けてくれ」

「間違えてる上に三人いないじゃないか。まあそこで思いついたんだが、こういうのはどうだろうか？」

明人はニヤリと口元を歪めると、俺の耳に口を近づけた。

——そして日曜日。

「……………あの野郎。図ったな」

アレから三日、結局内気な俺は朝生さんと話せず終いでこの日に至っていた。

そう、そんな俺とも今日でサヨナラ！

携帯電話を片手にナウなヤングに生まれ変わり、朝生さんとラァアブラブウウてんきょ……………のはずだったのだ。

携帯電話を買うために駅までやってきた俺だったが。

明人との待ち合わせの場に現れたのは、もう一人の転校生”大野あかり”その人だった。

「…よろしく」

「あ、あはは。よろしく。ちょっと電話してきていいかなあ」
「…どうぞ」

シユパパパッ！

俺は駅構内に設置されている硬貨オンリーのピンク色の公衆電話に駆け寄ると、十円硬貨を叩き込み、自宅よりも押し慣れたダイヤルをプッシュする。

ブツッ、プルルルル。

『はい、鰐島ですが？』

ワンコールで電話口に現れたのは元親友の鰐島明人である。

ああ、たった今親友の縁を切ったところだ。

「説明してもらおうか？ 硬貨に限りがあるので手短に」

『お、その様子だと無事エンカウトしたようだね』

「手短にといったぞ」

俺は追加の十円玉を投入口に流し込みながら答える。

『いや、悪い悪い。でもまあ、彼女携帯持つてるし、東京育ちだし、俺に聞くよりも遥かに良いと思うわけだ。そこで親友のために一肌脱いで頼み込んだわけ。そしたら……いいよ。って言うもんだからさ！ いやあ、大野さん良い人だねえ！』

ご丁寧に物まね入りだ。

「つまり、あれか？ 俺は大野さんと一緒に携帯を買いに行くわけか！」

『その通り、良かったな。デートできて』

ブツッ！ ツーッ！

十円分の通話時間はあつという間に過ぎ去り、明人との通信も途絶える。

で、でーと？

俺が？ 大野さんと？

くるりと大野さんの方に振り返ると、いつも通り無表情の大野さんが立っている。

しかし、今日は制服ではなく私服を着用していて、シックな黒いワンプイスがふわっと風に揺れる。

やばい、すごくかわいく見えてきた。

はっ！

いかんいかん！ 俺は朝生さん一筋なんだ！ ギアナ高地で身につけた明鏡止水の心でえ……。

「…どうしたの？ 隣町。いくんじゃないの？」

必死に心を落ち着けていると、いつの間にか近くまで来ていた大野さんが俺の顔を覗き込む。

いつもはメガネの反射で見えない大野さんの目が、俺の頭が影になり薄っすらと覗く。

ドクンッ！

「あ、あ、あー！ そうだったなあ！ それじゃあ、い、行こうか？」

引き込まれそうになった視線を振り払い、ぎこちない動作と上擦った声でキップ売り場にむかう。

い、いかん。

気をしっかり持っていないと。

震える手でキップを購入すると、大野さんと共に電車に乗り込む。一両編成の電車内は休日だというのに誰一人乗っていない。

この電車よく廃線にならないな。

とりあえず、適当に真ん中の席にドカツと座る。

人がいないと座る場所には困らない。

大野さんも俺の隣にちょこんと座る。

けたたましいベルと共に電車がゆっくりと動き出す。

ウイーン。ガタンッゴトンッガタンッ……

ま、間が持たない。

なにか話しかけなければ！！

「えーと、いい天気だあねえ」

「…そうだね」

タタンッタタンッタタンッ

電車はいよいよ加速がつき、小刻みで心地よい揺れが俺たちを包む。夏の日差しが車内を明々と照らし、逆に影となった部分はより深い闇を湛えている。

エアコンのゴーという音がやけに耳障りだ。

「…ねえ。窓、開けていい？」

「え？ 窓？ あー、いいんじゃない？」

そう言つと大野さんは電車の窓に手をかけると上に持ち上げる。

「…うー。うー」

が、電車の窓はビクともしない。

あ、大野さんの顔が真っ赤になつてゐる。

どうやら全力で持ち上げているようだ。

「…ふう。…開かない」

「どれ、貸してみて」

大野さんが場所を譲り、今度は俺が窓に手をかける。

グイッ！

「あれ？」

異常に重たい。

つてコレ。フレーム歪んでないか？

ええい、畜生。

「ふんぬううつう！」

今度はかなり本気で押し上げて見る。

ガリッ！

少しだけ動いた。

よし、次は全力で！

「フルパワー！」

バンッ！

全力を込めた一押しで窓が一気に上まで押し上げられる。

生暖かい風が夏の匂いと共にぶわっと車内に流れ込み、先ほどまで

聞こえなかった蝉時雨が降り注ぐ。

「…すごい。…ありがとう」

「はは、どういたしまして」

大野さんは車窓に顔を近づけると、その小さな体に思いつきり空気を溜め込み、排出する。

「…東京だと。こんなこと、できないから。…一度やってみたくて」

「そつだなあ、あんなに人がいたらできないかもな。考えてもみなかった」

一度、ニュースの映像で東京の朝の通勤ラッシュというものを見たことがあったが、あの状況では窓を開けるどころか身動きすら取れないのではないか？

その点ここの電車ならば乗っていたとしても、老人が二、三人といったところだ。

少々のことなら誰も文句をいったりしないだろう。

「…それに、…空気がおいしい」

そう言うと、大野さんはもう一度大きく息を吸い込む、すうと静かに膨らむその胸は小さいながらもはつきりと女性を誇張しており…。俺としても自然とそちらに目が行ってしまう。

そのまま、ゆっくりと視点を上げていくと、そこには大野さんの横顔があった。

吹き込む風が大野さんの髪を躍らせ、いつもの無表情な顔がすこしだけ綻んでいる。

唐突に、大野さんの表情がいつもの無表情に戻り…

「…あ。…そういえば」

「え、え！ なに？」

いかん！ ちよつと見惚れてしまった。しつかり、意識を保たねば…。

「…朝生さんに告白。するんだよね？」
「ぶ！」

大野さんの口から放たれた爆弾発言。

一体、どこで情報が…。

「な、なぜそのことを」

「…鰐島君から。聞いた」

うん、殺そう。

帰ったら真っ先に殺しに行こう。

俺は明日からただの殺人犯です。

「…そのために。携帯、買うんだよね」

「そ、そうだ。でも、このことは内密に……後生だから……」

「…わかった。それで、どこの機種にするの？」

「キ、キス？」

「……キス、じゃなくて。機種、どこの会社の携帯にするのかって、ぎゃふん！」

俺様またやらかしちまったYO！

田舎者丸出しな上に下心も丸出しじゃないか！

「すびばぜん。なんにもわがらないんで…」

ぶわっ、あまりの情けなさに涙があふれてくる。

なんてダメなヤツなんだろう。くっ！

「…泣かなくても、…新規で加入するなら。ここの、会社がおすめなんだけど」

大野さんがゴソゴソとポケットから取り出したのは、まさに携帯電話！

学校の先生がもっているような黒くて四角いものではなく、流線型のフォルムでオレンジ色のカラーリングが施され、白いふわふわした謎の生物のストラップが2つぶらさがっている。

こ、これが携帯電話！

「…ここの会社、一人で加入するなら、一番安くなると思う」

「会社によって違うんだ……」

「…うん、それにデザインも、いっぱいあるし。使い方も、それぞれ微妙に違う」

「衝撃の事実だな……」

「…それにね……」

大野さんがさらにポケットからなにやら大きな機械を取りだし、つてええええええええ！？

大きくなっておい、なんだよその中華鍋みたいなアンテナ！

いや、そもそもなんだよそのポケット！

中は四次元に繋がってるのか！？

「…これが。私の作った簡単な、電波増幅器なんだけど」

「はあ……」

いやいやいや、よくは分からないが簡単に出来るようなものでないことは俺にもわかるぞ。

ちよっと女の子っぽいところを見て油断してしまった！

大野さんは東京ではなく、宇宙からきたグレイ型宇宙人にちがいない。

等身も似てるし。

メガネの具合もそっくりじゃないか？

俺がそんな疑心暗鬼に捕らわれている最中にも、大野さんのポケットからはコード類や計器類などがゴロゴロ出てくる。

「…コレを使えば、山に囲まれた、ここでも携帯が使えるの」

「す、すごいな」

大野さんは機器のセッテングを一通り終わると、最後に携帯電話にコード類を接続する。

「…ほら、この画面端のマークあるでしょ？これは、電波が届いてるかどうかを示すものなの」

「う、うん」

「…いまは棒が一本しかないよね？…つまり、電波状況があまりよくないの。そこで」

パチンツ！

大野さんが電波増幅装置のスイッチを押す。

すると車内のスピーカーが一斉にノイズを吐き出しはじめ、運転席からは車掌さんの悲鳴が聞こえてくる。

先ほどまで快調だったクーラーも断続的に冷たい風を吐き出すようになり、

「な、なんだあ！」

慌てふためく、俺の肩を大野さんがポンポンと叩く。

振り向くと大野さんが携帯電話を差し出し、画面端を指差している。ピッ！

そして、画面端のマークに棒が二本追加された。

――隣町。

「…ごめん、なさい」

「いや、いいいいいよ。ただ、電車の中では携帯電話の使用は控え
た方がいいな。ペースメーカーつけてる人はまず間違いなくあの世
逝きだから」

電車の機器に多大な影響を及ぼした大野式電波増幅装置だった
が、なんとか隣町までたどり着いた。

俺たちは逃げるように電車を降り、現在に至るわけだ。

「私、機械のことになると。後先考えられなくて」

「よく分かったよ」

ただの無口眼鏡ッ娘だと思っていたんだがな。

どうやら俺の予想を遥かに超えたサイコ娘だったようだ。

「さて、気を取り直して当初の目的を果たそう。電気屋さんにいけ
ばいいのかな？」

「…うん。…このへんの地域には、専門ショップがないから。それ
がいい」

そんなわけで俺たちは最寄の大型電気店へと向かうことになった。

全国にチェーン展開している大手電気店、こんな偏狭の地にまでシ
エア拡大を狙ってくれてありがとう。あまり利用することもないが、
今は大いに感謝しておこう。

しかし、こうして歩いてみるとこの隣町にも着々と近代化の波が押
し寄せているのが分かる。

つい先日まで田んぼだった場所は、月極駐車場へと変貌を遂げ、見
上げれば山と空しか見えなかったパノラマには、大型ショッピング
センターの看板がフェードインしている。

一体、いつの間にコレだけのものを作り上げているのか。日本の土
木作業員は化け物か！ などと考えてしまうのも無理はないだろう。
そんな事を考えているうちに俺たちは目的地の電気屋前にたどり
着いていた。

大きなガラス張りの自動ドアをくぐるとクーラーによってキンキン

に冷やされた空気が迎えてくれる。

ビバ文明の利器。

さて、お目当ての携帯電話コーナーは……。

俺は田舎者らしくキョロキョロと商品の置いてある場所を探す。

そのとき唐突に左手にやわらかい感触が…。

「…こつち」

大野さんでした。

どうやら迷っている俺を手をとって導いてくれるらしい。店内の空気で冷やされた手は冷たく、見た目に変わらず小さかった。

ああ、女の子って柔らかいんだな。

「…ここ」

携帯電話コーナーの前にやってくると、その手は簡単に離される。ちよつとだけ残念な気がした。

「おお、これは」

俺の目の前には所狭しと並んだ携帯電話がズラリ。

ついにこのときがやって来たか。

「…基本的にはこの会社の方が性能がいい。…私のもこの会社だから」

「なるほど、どれがいいかなあ。これだけあると迷っちゃうなあ」

「…このあたりは性能は大体同じだから、…好きな、デザインで選べばいい」

うーむ、どうしたものかなあ。

好きなデザインかあ。

ん！

その時俺の目に留まったのは見覚えのあるフォルム。

たしか、これは大野さんの携帯と同じものだ。

「ふむ」

俺はその携帯を手にとると、二つに折られたボディを開いてみる。中のディスプレイには絵がはめ込まれているだけで実際に動いたりはないが、ボタンをポチポチといじってみる。

不思議と手になじむ感じ、ボタンも押しやすいし画面も大きくて見やすそうだ。

よし！

「これにするよ」

「……え」

「大野さんと同じヤツ。大野さんが選んだものなんだから。いいやつなんでしょ？」

「…うん。現状では1番。…でも、それでいいの？ ほかに、あるけど」

「いいさ、それに同じものの方が教えてもらいやすそうだから」

「…上坂君が。それで、いいなら」

「よし！ じゃあ早速買ってくるよ」

商品をレジまで持っていくと、各書類への記入が待っていた。

大野さんに教えてもらいながらボールペンを握る俺。

むう、なんだかメンドクサイな携帯電話って。

何度自分の名前と住所を記入したか分からなくなった頃にようやく書類を書き終えることが出来た。

「ふう」

「では、お客様。電話番号やメールアドレスの設定が終わりましたら受け渡しいたしますので、三十分ほどお時間を頂いてもよろしいでしょうか」

よろしいものにも、はい、と答えるしかないじゃないか。

「…うん」

うんって答えましたね大野さん。

「さて、三十分暇になったな」

「…あの」

「ん？」

「…私、すこし。見てみたいところ、あるんだけど」

心なしか眼鏡がいつもより輝いている。

これは一般人で言うところの目を輝かせている状態なのだろうか？

まあどちらにしても大野さんには携帯の買い物に付き合ってもらっているわけだから、こちらとしても付き合っただけあげるのが礼儀というものだろう。

「いいよ、で？ どこかな？」

「…あつち」

大野さんが指で指し示したのは、パソコンコーナーの一角。そこには配線や基盤をむき出しにした機械類が並べられている。

どうやら、パソコンの一部らしいが…。

それを見て眼鏡もとい目を輝かせる大野さん。

正直、どこが楽しいのか理解できない。要はあれかプラモデルを見て、ガラス越しに目を輝かせる少年に似た心境なのか？

しかしまあ、クラスの連中驚くだろうな。

大野さんのこの表情を見たら。

そう、笑っているのだ。

いつも無表情で、感情の波が乏しい大野さんが屈託のない笑顔で機械を眺めているのだ。

この話を信じてくれる人間がどれほどいるだろうか、いやいないだろうな。

実際に目の当たりにしている俺も信じられないのだから。

やっぱり、大野さんも人の子なんだなあ。

「…どうしたの？」

俺の視線に気づいたのだろう。

大野さんがこちらに振り返り首をかしげる。

「あ、いや。楽しそうだなって思ってね。大野さんが笑ってるの初めてみたから」

「…私、笑ってた？」

「ああ、そりやもう楽しそうにね」

大野さんはまた元の無表情に戻ると、自分の顔をぺたぺたと触れてたしかめる。

「…笑って、ないみたいだけど」

そりやそうだろうよ。

無表情に戻ってから顔を触っても笑っていると認識できるわけがない。

「そうだなあ、でも、大野さんは本当に機械が好きなんだな」

「…うん」

……ほら。

笑ってるじゃないか。

帰りの電車内、俺たちは早速携帯電話の初期設定をはじめた。

商品の箱の中には分厚い本が二冊も同封されていたが、パラパラと目を通しただけで気が遠くなっていく感覚を味わうことが出来た。まったく、マニュアルを作っている連中に言いたい。

お前らが分かるマニュアルを作られても、初心者にはわからないのだと！

で、結局。大野さんに教えてもらっているわけだが。

「…そう、そこで真ん中のボタンを押し込むの。…違う。そこは長押し」

やはり機械オンチはすぐには直らない。

さっきから大野さんの手を煩わせてばかりだ。指示は聞こえているし、理解も出来る。

だがそれが脳から指先へ送られるプロセスで違う情報へと置き換えられてしまうのが機械オンチの特殊技能といったところだろうか。言われたボタンとは違うボタンを連打してしまうような事もしばしば。

「ぬ、ぬう。こうか！」

「…身体を傾けても、カーソルは、動かない」
分かっているのだ。

そんなことは百も承知である。

しかし、俺は”レーシングゲームでもカーブ時には身体を傾ける村民”の村民であるからして、脊髄反射でかたむいてしまうのだ。

「ううん。難しい」

「…大丈夫。一応、個人情報、打ちこめた」

「しかし、先は長そうだな」

「…じゃあ、メールのやり方」

ついに、来たか！

メールをするために携帯電話を買ったのだ。

メールができなければお話にならない。

「…まず、私から送るから。返信、してみて」

ピッピッピッ！

す、すごい。俺が両手を使って一生懸命打ちこんでいたのに、大野さんは片手ですらすると文章を打っている。

きつとあの小さな親指にはお手製加速装置が仕込まれているに違いない。

「…送信」

ピロリロリンロンリン。

数秒後、俺の携帯にメールの着信を知らせるメロディがカラーランプの明滅と共に流れる。

画面には”新着メールあり”と表示されている。

来たぞ、記念すべき初メール！

おぼつかない手つきで大野さんからのメールの封を開ける。

なるほど、これはなかなかワクワクするな。

メールも電子情報とはいえ手紙である。この封を切る瞬間の期待感というものはやはり同じものを感じる。

えーと、なにになに。

>送信者：大野 件名：テスト * 送信テスト。届きましたか？
届いたら返信して下さい<

ふむ、前から思っていたがどうして文面になるところ、敬語になるのだろうか。

不思議だ。

とにかく返信だ。

えーと、まずは返信ボタンを押してえ、えーと…。

さっき習った通りにやっでは見るものの、大野さんのように上手くはいかないな。

結局俺が返信できたのは電車が駅にたどり着いたところだった。

「ふう、やっと着いたか。あ、大野さんごめんな。要領悪くて、どうも機械と相性が悪くてな」

「…別にいい。…遅くても、やり方を理解できたのなら。…すぐに慣れる」

「だといいな。今日は買い物に付き合ってもらったり、教えてもらったり。ありがとう」

「…私も、パーツ見れたし。…楽しかった、だから気にしないで」

「じゃあ、今日はここで。また明日な」

「…あ」

俺がその場から立ち去ろうとすると、背中を引っ張られる感覚で俺は動きを止めた。

大野さんが俺のシャツの裾を掴んでいたのだ。

「…あの、これ朝生さんのメールアドレス」

しまった！ それがないとこの携帯電話も何の効力ももたないじゃないか！

俺は差し出されたクマさんのキャラクターがプリントされた可愛らしいメモ用紙を受け取る。

「あ、ありがとう」

「…それと」

大野さんは自分の携帯を取り出すと、白くてフワフワした謎生物のストラップの一つを外すと、俺に差し出した。

「…これ、携帯電話の画面が汚れたら、…これで拭くの。だから、はい」

「おお、そんな便利アイテムだったのか。じゃあ有り難く」

「…朝生さんの事。応援、してるから。…がんばって」

「あ、ああ」

「…じゃあ、明日。学校で」

そう、言い残すと大野さんは夕焼けの田舎道に消えていった。駅前に取り残された俺は一人こう思っただった。

は！

携帯もおそろいでストラップもおそろいつて！！

色々と誤解されるんじゃないか！！

よし、折角もらったストラップだが、コレは携帯にはぶら下げないでおこう。

俺は白いフワフワ生物とメモ用紙をポケットに押し込むと帰路に着いた。

ようやく家にたどり着き、自室に入るとやっと一息入れることができた。

今日はなんだかんだで疲れたな。

大野さんの意外な一面も見る事になったし…。

……大野さん…か…。

そういえば、今日まではろくに会話すらしたことなかったな。

まさか、機械好きのハイテク少女だったとは。

明人の野郎、その事知ってて大野さんに頼んだのか？　だとするならばヤツもなかなかやるな。

さて、では行ってみようか。

ポケットからメモ用紙を取り出し、そこに書かれたアルファベットの文字列を慎重に打ちこんでいく。

ついに朝生さんとメル友になるときがきたぞ。

高鳴るドキのムネムネが抑えられない！

四苦八苦しながらメールを打っているうちにはや三十分。

やはり、慣れるまでは時間がかかりそうだ。

とりあえず文章を打ち終え送信準備は整った。後はボタン一つで朝生さんにこのメールが届くって寸法だ。なんて便利社会になったの

だろうか。

でわ、いざ送信！

無駄に送信ポーズを決めておそくは朝生さんの住んでいる方向であろっ方面に向けて電波を発信する。

多少、俺自身が電波受信しているのでは無かるうかと気づいたのは送信ポーズを決めてから三分後になってからのことだったことはココだけの話である。

>送信者：上坂 件名：携帯買いました * どうも、クラスメイトの上坂です。本日携帯電話を購入したので、この機会にメル友になつて頂きたいなと思いメールした次第です。なにしろこんな田舎です。で携帯電話を持っている人物も限られており、数少ない携帯仲間としてこれから仲良くしていただければと思います。まだ不慣れなもので返信に時間がかかったりするかもしれませんがその辺はご容赦ください。<

ピロリロリンロンリン。

数分後、朝生さんからの返信が届いた。

やっぱり都会の人はメールのスピードが違うなあ。ゴッドスピード？さて、どんな内容だろうか。

コレで”キモイ”とか一言だけだったら俺、首吊るしかないな。

そんなネガティブ思考でメールを開くことにより、もしもの時のダメージに保険をかけつつ……

>送信者：朝生 件名：Re：携帯買いました * 上坂君携帯買ったんだw確かにこっちには携帯持つてる人少ないよね←だからメル友が増えるのは大歓迎o(＾ー＾)o これからよろしくねwあと、そんなにかしこまらなくてもいいよあ。友達なんだからフランクに行こうぜい(＾・＾)b<

こ、これは！！

なかなか好印象なのでわ！！！

やはり俺の作戦に抜かりはなかった！

しかし、さすが都会の女子高生。記号をあわせて絵を作るとは……。

それに、wとかゝとかいまいち理解できない記号が散りばめられている。

一体どのような意味が込められているのだろうか。明日にでも大野さんに聞いてみよう。

朝生さんとのファーストコンタクトはかなり好印象。性格も思ったとおりの明るいサバサバした性格のようだ。

ま、まさに理想系！

おおっと！ こんなことしてる場合じゃない。

メールの返信をせねば！

そしてこの日の夜は朝生さんとのメールで更けていった。

間違いメールにご注意を

——次の日。

「よう、親友。どうだった首尾は？」

朝の教室でまったりとしている所に現れたのは自称、俺の親友を語る明人だった。

「ふ、ふふふ」

「まさか、ダメだったか！　あまりのショックで前にも増して頭のネジが」

「ふふふ、バツチりだ！！　事が上手く運びすぎて昨日の夜から含み笑いが止まらんのだよ！　ふふふ」

「それは、それで危ないな」

何とでも言う方がいいさ。今の俺は大変機嫌がいい。そうさご機嫌さ。アレから夜中まで続いたメールのなかで朝生さんとの距離はだいぶ近づいたと言えるだろう。

男子の中では俺が一番親密な位置にいるはずだ。

「ふふふふ」

「おい、本当に大丈夫か」

ガラガラガラガラ

「おっはよー」

その時教室に入ってきたのは、マイエンジェル朝生さん！

朝生さんは俺の姿を捉えると、にんまりと顔を歪め、こちらに向かって一直線に歩いてくる。

「おはよう。上坂君。昨日はちゃんと眠れた？」

「ああ、おかげさまでな。夜中までメールの練習に付き合ってもらって悪かったな」

「ふふん、どう致しまして。どう？　少しは慣れた？」

「まあまあかな。元が機械オンチだからな。厳しい道のりだ」

「へー、上坂君機械ダメなんだ」

い、いける！

普通に会話してるぞ俺！

へへ、教室中の男子の突き刺すような視線が痛みを通り越して気持ちいいぜ！

悪いな、男子諸君。俺は勝ち組なのだよ！

うははははは！

「じゃ、ホームルーム始まるから席にもどるね。じゃ、後でね」

「おう」

朝生さんが席に戻ると俺の周りはクラスの男子連中によって埋め尽くされる。

先ほどまでの爽やかな空気はどこへ行ったのか、言い表しがたい熱気とプレッシャーが俺の全身を包み込む。

「おい、上坂。お前、どんなマジック使ったんだよ」

「ぼ、ぼ、ぼ、僕にも教えてほしいんだな。ふう…ふう…」

ワイワイガヤガヤ。

ふふ、負け犬たちの遠吠えが耳に心地よいわ！

貴様等は戦局を見誤ったのだよ！ 目先のことばかりに踊らされおつて、大局を見据えて動かなかった事が貴様等の敗因だ！

即ち…

「負け犬たちにくれてやる言葉は一つだけだ………悪いな」

爽やかな笑顔。

「そこまでにしとけよ。俺も含めて皆が可哀想だろう」

俺の鼻が約三十センチメートルに達したとき、横から明人が割って入り、その場は丸く収まることとなった。

俺個人としてはもう少しからかってやりたいところだったが、本気で闇討ちされる危険性をはらんでくるのでコレぐらいで我慢しておいてやろう。

そして、昼休み。

俺は大野さんと一緒に屋上で昼食を摂っていた。

もちろん携帯電話について色々教わるためである。

「…wっていうのは”笑”を省略して頭文字だけをとったもの。…これが定説」

「なるほど、そういう意味だったのか。モグモグ」

「…←っていうのは。…語尾を、下げる時に使うの」

「ぐあ、よく考えられてるな。ますます奥が深いぜ。電子世界モグモグ」

相変わらず大野さんの携帯捌きはすごい、親指がすべるようにボタンをプッシュし、話している速度と同等のスピードで言葉を紡いでいくのだから相当なものだ。

「……ストラップ」

「え？ モグモグ」

「…ストラップ。してないね」

あ、あの白いフワフワ謎生物のことか。

「ごめん。携帯も同型買ったし、おまけにお揃いのストラップまでつけてたら誤解されそうだから付けなかったんだ。大野さんも迷惑でしょ？ そうなったら」

「…私は、…別に」

ガチャ！

唐突に屋上のドアが開け放たれる。

「あー、こんなところにいた！」

開け放たれたドアから顔を覗かせたのは朝生さんだった。

片手には可愛らしいピンクのお弁当包みが見える。

「あつれー？ 大野っち。上坂君と仲いいじゃん。うりうり」

朝生さんは、大野さんに駆け寄るとその小さな頭を乱暴にこねくり回す。

「せっかく一緒にご飯食べようと思ったのに。男の子とご飯食べてるなんて」

「…いたい。…いたい」

あまり痛そうに聞こえない抗議の声が聞こえてくるが、それに構わ

ずコネコネしている朝生さん。

さすがにちよと可哀想になつてきたな。

いまにも大野さんのマツチ棒のような首がもげて仕舞いそうである。
「そろそろ、やめてあげたらどうだ？　なんか絵的にいじめてるみたいだぞ」

「えー。大丈夫だつて。大野っちはこう見えて頑丈なんだから。前の学校の時ね、階段から転げ落ちてね」

おいおい、大スペクタクルだな。

「しかも、落ちた先に先生の車が通つてね。そのままどつかーん」
ほほう、よく生きてたな大野さん。

そして、よく問題にならなかったな先生。

本当に頑丈なのか…。

「それで、私が駆け寄つて大丈夫つて聞いたら、…平気。…ちよと肩をぶつけた。とか言つてスタスタあるいていつちやつたんだよ？

」

「頑丈すぎだろ！」

さすがに突っ込んだ。

うーん、まさかとは思つが自分自身をメカに改造してたりしないだろうな。

思考中。

ごめん。大野さん。完全に否定できない俺がいたよ。

「でも、意外だな。大野っちが男の子とこんなに話しているなんて、いままではこんな事なかったのに」

と、朝生さんはニヤリと笑みを浮かべながら大野さんの小脇を突付く。

「…私だつて。…話す事ある。男の子とも」

しばらくの沈黙の後に、大野さんは答える。

なんだか、大野さん。いつもよりもムキになっているというか、感情的な物言いだな。

「ふーん」

そしてその様子を見てますますにんまりする朝生さん。

うーん、女子のやり取りはよくわからんなあ。

「…私。先に教室に戻ってる。…上坂君まだご飯食べてるから、朝生さん一緒に食べるといい」

大野さんはそれだけ言い残すと荷物をまとめてスタスタと歩き去ってしまった。

これは俺に気を利かせたつもりなのだろうか。

「ほっほう！ 上坂君。どうやら大野っちに気に入られたみたいだねい」

「む、そうなのか」

「あの無口な娘が。あんなに話してるなんて。めずらしいもの」

「ふーむ」

「まあ、せつかくの大野っちのご好意だから。ご飯食べよ。ね」

「お、おう」

なんだか分からないがどうやら朝生さんと二人で食事できるようだ。ああ、大野さんありがとう。

それから、朝生さんとたわいもない話で盛り上がった。

前の学校の事、メールの事、大野さんのこと。

なんでも、大野さんは前の学校では成績トップ。

特に理数系、工学系には強く、すでに東京大学からオファーがあったとか無かったとか。

いわゆる”天才”と呼ばれる人種らしい。

なるほど、その片鱗が大野式電波増幅器…。

楽しい昼食時間はあつという間に過ぎ去り、大音量のチャイムが夢の時間の終わりを告げる。

「さあて、長居しちゃったね。もどろつか」

「そうだな」

「…上坂君さあ、大野っちの事。どうおもう？」
唐突な質問だった。

どう思うか？ まあ、無口で機械好きで…。

「いい奴だとおもうけど」

「ううん、そういうのじゃなくて……」

うーん、なんだか歯切りが悪いな。

朝生さんは一体なにを言わんとしていたのだろうか。

「やっぱいいや。また今度聞くな」

「あ、ああ」

ふむ、やっぱり分からんな。

世の中不思議でいっぱいだ。

「一雨、来そうだな」

天を仰ぐと、先ほどまで晴天だった空はいつの間にかどんよりとした分厚い雲が覆っていた。

――放課後。

俺は大野さんの姿を探していた。

どうも昼休みが終わった後から様子がおかしいのだ。

休み時間になる度にどこかヘラフラフラと消えてしまふし、授業中は――と窓の外を眺めていて俺のほうからは後頭部しか窺うことが出来ない。

まあ、元々そういう人間だったと言えば、そうなのだ。

だから、周りに人間はあまり気にはしていない。

――だが、何かが違う。

確実に普段の大野さんではないという確信が俺の中にはあった。

その確信を胸に、こうして大野さんを探しているのだが……。

お！

窓の外を見ると大野さんが校庭付近を歩いている。

はや！ もう、あんなところに！

俺は急いで階段を駆け下り、靴を履き替え大野さんの姿を追った。全力疾走とまでは言わないまでも結構な速度で走っているのになかなか差が縮まらないのは仕様なのか？

「よ、よう。はあはあ。大野さん歩くの速いな」

なんとか大野さんに追いつくことが出来たが、競歩の選手もびつくりな速歩きは以前継続中である。

だから、たまに小走りで追いつかないとそのまま取り残されてしまいそうだ。

「……………」

応答なし。

聞こえていないのかな？

「あー、テスト。本日八曇天ナリ。本日八曇天ナリ。聞こえますかー」

「…そんなことしないで。聞こえてる」

聞こえてるんだったら、はじめから答えろってんだ。

「どうしたんだ？ 昼休みから様子が変だけど」

「…別に、いつもと一緒に」

取り付く島も無い。

「ほ、ほら。携帯の事とかまた教えてくれよ。このボタンってさ…

…」

「…朝生さんに聞けばいい。…いいから、どうか行って。迷惑」む。

さすがの俺も少しカチンツと来た。

人が折角心配してやっているのに、こんな返され方したら誰でも怒るだろう。

「そんな言い方ないだろ」

「…本当のこと。…うるさいな」

このっ！

俺は前を歩いていた大野さんの肩に手をかけ、乱暴にこちらを向かせる。

「いいかげんに！ ……し…ろ」

そこまで言って俺の言葉は途切れ、いままであった怒りの熱が徐々に引いていく。

振り向かせた大野さんの目には大粒の涙が溜め込まれていたからだ。

「…うるさいな。うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい！」

パシンッ！

大野さんは俺の手を叩くように振り切ると、校門の方へ駆け出す。

「ちょ、おい！ 大野さん！」

俺も咄嗟に大野さんの背中を追いかける。

ポツポツ………サアアア。

おれが駆け出すと同時に空から大粒の雨が降り注ぐ。

よりもよってこんなときに夕立とは、とことんついていない。

くそ、雨が顔面に叩きつけられるものだから、よく前が見えん！

持っていた学生力バンを盾にし、何とか走れるだけの視界を確保。

必死に大野さんを追うがなかなか追いつけない。

まったく、あの小さな体のドコにコレだけの力が眠っているのだろうか。

道は徐々に狭い未舗装な道になってくる。

どうやら山道を通って俺を撒くつもりらしい。

「お、大野さん！ 山道は危険だから、とりあえず止まってくれ！」

「

俺の声が届いているのか、届いていないのか。

どちらにしても大野さんが速度を緩める様子は無い。

こうなったら、行くしかないだろう。

幸い俺は生まれ育った土地だけに山道には慣れている。

ほれ！ この通り！ こんな悪条件下でもこの軽やかなステップで

大野さんを射程距離に…

ズルッ！

「あ」

次の瞬間、俺の身体は宙を舞っていた。

ぬかるみに足を捕られてしまったらしい。

しかも、最悪なことに俺たちが走っていた道の脇は、ちょっとした崖となっており俺はその崖を滑り落ちていた。

大野さんの背中が遠ざかって行くのが最後のビジョン。

ガツンッ！頭部への鈍い衝撃とともに視界はブラックアウトする。

目を開けるを既に辺りは闇に包まれ、夏の虫達の大合唱の舞台となつた森の中で目が覚めた。

ずっと雨露に晒されていたからだろうか、体中が冷えきっていた。

ズキンッ！

「っ痛う」

身体を起こすと頭部に痛みが走る。

しかし、その痛みのおかげでだいぶ意識がハッキリしてきた。

確か俺は大野さんを追って山道を走っていて、それで…。

上を見上げると山道までは結構な高さだ。

生きているだけでもありがたいと思わなければならぬかもしれない。

おそらくは落下時のダメージだろう。

頭部の痛みだけではなく、体中がギシギシと痛む。

だが、ずっとこうしているわけにもいかない。

どうする……。

そうだ、携帯電話！

こんな時こそ使わねば！

俺は携帯電話を取り出す、が。

「け、圏外……」

残念ながらこの地域では携帯電話は使えないようだ。

なんのための携帯電話だ、ちくしょう。

はあ、そういえばこの携帯電話は朝生さんと仲良くなるために買ったんだっとな。

そういえば、朝生さん。

昼休み何を言おうとしていたのか……。

「……上坂君さあ、大野っちの事。どうおもっ？」

俺は……。

どうなんだろう。

なんで、こんな目にあってまで大野さんを追いかけたのだろうか。

――心配だから。

そう、心配だったから。いつもの様子が違ったから。

だが、他の人達が気づかない程度の変化だ。

大野さんだって人間だ。たまには気の乗らない日があってもおかしくはない。

もちろん体調が悪かったのかもしれない、女の子には例の日もある訳だしなあ、あはは……。

……ほんと、なんでだろうな！。

プルルルル！ プルルルル！

その時、ならない筈の電話が鳴った。

一瞬、夏の虫が大きな音を上げたのかと思ったが、確実に俺の携帯からの音だ。

「電波状況がよくなったのか」

発信者は、”大野あかり”。

ピッ！

「もしもし」

『……あ。……上坂……君？ 』

「ああ、俺だよ」

『……今何時だか分かる？ 今どこにいるの』

幸い、携帯には故障が無かったので闇夜に浮かぶディスプレイにはハッキリとデジタル時計が時を刻んでいた。

えーと、なんだ。もう零時なのか。

『……こんな時間までどうしたの？ いま青年団の人達が、上坂君をさがしてるんだよ？ 』

そんな大事になってたのか。

こんな時間まで音信不通なら、それもそうか。

「そりゃ、ありがたい。実は大野さんをストーキング中にドジってな。まだ、山の中で転落したままなんだ」

『…え。だ、大丈夫！ ケガとかしてない』

「少し頭を打ったけど、この通り普通に会話できる程度には平気さ」
『…そう、よかった』

（おーい、おーい）

闇の奥から青年団の人達の声が聞こえてくる。

どうやら、助けが来たようだ。

「ここだー！ ここー！」

俺は上を歩いている人達に向かって大きく声を張り上げる。

「お、上坂んとこのぼっちゃんか！？ 無事か？」

「なんとか！ ただ、体打って動けないんです！」

「おーし、今から助けるから。そこ動いちゃならねーぞ！」

「分かりました！」

ふう。

「大野さん？ いま青年団の人に見つけてもらえたよ」

『…今日はごめんね。…うるさいと言って』

「いや、俺も結構乱暴だったかもしれない、ごめん」

『…ううん。…上坂君は私のこと、心配してくれただけ。私、ちゃんと分かったの。上坂君が心配してくれた事。…きっとそんな上坂君に甘えてみたかっただけなの』

「大野さん…」

『…とにかく、ごめんね。…明日からは普段どおりの私だから。…

もう、大丈夫だから』

「うん」

『じゃあ、また明日』

「また、明日」

プツッ！ ツーッ！

はあ、明日からは普段どおりか。

また、無口で機械好きでちびっ子が復活するわけか。

結果論だが大野さんが普段通りに戻るなら、俺がこうして体中を痛めただけの価値はあったのだろう。

あれ？

そういえばなんで大野さんの電話だけ通じたんだ？

たしか、ここは圏外だったはずだ。

もう一度、ディスプレイに視線を落としてみるがやはり圏外だ。

一体なぜ。

あー、そうか。大野さんまたあの電波増幅器を使っただけ……。

村中の人が電化製品の異常動作でパニックになってなければいいけど。

——次の日。

あの後、怪我の手当てや一応脳の精密検査やらで連れまわされ、床についたのは深夜二時を過ぎてからだった。

おかげで今日は怪我によるものよりも、睡眠不足によるダメージのほう体が残っていた。

はあ、とりあえず授業中は眠らせてもらおう。

これは授業に対するサボタージュではない。そんないい加減な気持ちで受けては逆に失礼だと思い、授業を受けない事なのだ。

いつでも授業に対する真っ直ぐな俺の心が自然に夢の世界へといざなっていくのだから仕方ない。

さーて、今日はどんな夢を見ようかなと。

「おはよう」

「あ」

声のほうを振り返ると、大野さんが立っていた。

いつもと変わらない。いつもの大野さんだ。

「おはよう。あ、そうだ。大野さん、俺今日告白しようと思うんだ」

「……そう。……上坂君が。そう決めたなら」

「それで、ぜひとも大野さんにも立ち会ってほしいんだよ」

大野さんは少しだけ驚いた表情をした。

まあ、無理もない。

他人の告白に立ち会えなど言われて驚かない人間がいるだろうか。

「ほら、メールで告白するから。間違えたりしたくないだろ。技術指導ってことでね」

「…なるほど。…技術指導。わかった、立ち会う」

「じゃあ、放課後にな」

俺は席につくと朝生さんのほうを眺めてみる。

いつもどおり他の女子たちと楽しそうに話している。

俺の心に、迷いはない。

——そして放課後。

誰もいなくなつた教室に俺と大野さんがいる。

「…準備はいい？」

「ああ」

教室が夕焼け色に染め上げられた頃には、準備は整っていた。あとは、この送信ボタンを押すだけだ。

「…最後に、聞いていい？ …なんで朝生さんなの？」

大野さんの質問。

この質問にどのような意味が込められていようが関係ない。

俺の気持ちは既に決まっっていて、あとはこのボタンを押すだけ、ただそれだけなのだ。

「ノーコメント」

「…そう」

大野さんは少し寂しそうに俯く。

こうしてみると大野さんも随分と表情が豊かになったものだな。以前ならば、眉一つ動かすことなどなかっただろう。

「じゃあ、行くよ。送信つと」

運命のボタンがいま押される。

これで後戻りはできない。あとは返事を待つだけだ。ピロリロリイ。

数秒後、大野さんの携帯からメロディが流れ出す。

「…ごめん」

大野さんは携帯を取り出すとそのメールを見て、固まる。

「…ねえ、あれだけ確認したのに。…送る相手。間違えてる」

そう、俺の告白メールは朝生さんではなく、大野さんに送信されてしまっていた。

何度も確認した上で送ったはずだが、大野さんの所へ届いたメール。

「それでいいんだ」

「…え？ 良くないでしょ。…ほら、もう一回教えて、あげるから」
大野さんは俺の携帯に手を伸ばす。

だが、俺はヒョイとその携帯を顔の位置まで持ち上げると、大野さんの手は届かない。

「だからさ、これでいいんだ。俺は送る相手を間違えちゃいない。何度も確認したからな」

ついに大野さんの目はまん丸になり、非常に驚いた表情になる。

はは、やっぱり面白いな。

「…え？」

俺はゆっくりと携帯を握っていた手を広げると、白いものが俺の手から零れ落ちた。

「よく見るとコイツもかわいいな。それに便利だし」

そう、おれの携帯にぶら下がっているのは大野さんからもらったストラップ。

「…それ」

「ああ、大野さんからもらったストラップ。これでお揃いだな」

「…あ」

ようやく事態を把握したのだろうか。

夕日で真っ赤に染め上げられていた大野さんの頬が、更に赤みを帯びていく。

「…でも、…どうして」

「そうだなあ、俺も気づいたのは昨日の夜だ。崖から落ちたとき、

救助を待つ間考える時間はいっぱいあったからな。そして気づいたんだ…おれが本当に好きだったのは朝生さんじゃない。大野さんだったってことにな。いまから思えば朝生さんのことを考えてる時間よりも、大野さんのことを考えている時間のほうが長かった。いつも俺の心のなかにいたのは大野さんだった。そんな単純なことに俺は昨日、崖から落ちるまで気づくことができなかったんだ」

「…そう」

「誤解も解けたところで、聞かせてほしいんだが。返事」

結局洗いざらい喋ってしまった。

メールでの告白の意味は微塵もなかったが、これでいい。

大野さんがどのような判断を下したところで、俺の気持ちはすべて伝えることができたのだから。

いつもはやかましい蝉たちも今だけは静かに、大野さんの返事を待っている。

「…わたしの。答えは」

俺は瞼を閉じ、彼女の返事を待つ。

さて、イエスか。ノーか。

次の瞬間、俺の襟首に大野さんの手が回され、甘いにおいが鼻先を掠める。

目を見開くとそこには大野さんの顔があり、俺の唇は大野さんの唇で塞がれていた。

大野さんと俺の身長差からすると、大野さんが俺の首にぶら下がって口付けをしている構図になるのだが、そんな無理な体勢での初めてのくちづけは不器用で、情熱的で、機械的で、随分と長い間その体制のまま俺たちはお互いの唇を合わせていた。

ガラガラガラガラ！

唐突に開かれる教室の扉。

って！ まてこの状況は非常にまずい！

咄嗟に俺と大野さんは間合いを広げるが、時既に遅しといったところだった。

教室のドアから現れた人物はニヤニヤといやらしい笑いを浮かべており、慌てふためく俺たちを見て満悦のようだ。

しかも、よりにもよってその人物は朝生さん。

「ほっほう、忘れ物取りに帰ってきてみれば、随分と面白いものが見れたね。息まで切らしちゃって、うふふふ」

「あ、あの。これにはいろいろと深い事情がありまして」

「あーいいのいいの、気にしないで。私が知らないところですから上手くいったみたいだから」

俺の弁明はききとけてもらえないらしい、まあ決定的瞬間を見られて弁明もクソもないけどな！

「大野っち。……よかつたじゃん」

「……うん。……ありがとう」

「あーあ、でも先越されちゃったな。私も上坂君狙いだっただのにぶ！

「ほんとに！」

「うん、ほんとあ。うしし」

つまり、転校生二人は俺にぞっこんだった訳で、つまりどちらを選んだとしてもオツケーだった訳で、上手くすれば転校生どんぶ…。

バチンッ！

「ぎゃあ」

突如俺の左手を襲う、激痛。

あまりの痛さにのた打ち回る俺を大野さんが冷ややかな目で見下ろしてる。

その手には黒い物体が握り締められており、バチバチと紫電を放っていた。

は！

まさか俺、スタンガられた？

「あははは、上坂君。この調子だと浮気はできそうもないね」

「ぐう、まさか。スタンガンまで所持しているとは」

「…防犯、浮気、対策」

その様子をみてますます笑顔になる朝生さん。

そんなに楽しいですか、人の不幸が。

いや、一概に不幸とは言い切れないか、こうして大野さんと恋人になれたのだから。

俺は大野さんその小さな頭に手を乗せる。

ぽふっ。

「誓うよ。俺は君を幸せにする」

「……うん。……知ってる」

そういつて、大野さんは微笑んだ。

間違いメールにご注意を（後書き）

近未来ならぬ近過去のお話。

携帯電話をはじめて持ったときは結構嬉しかった気がしますが今ではそうでもないかもしれませんね。

つたない文章ではありますが読んでいただいてありがとうございます。でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4780n/>

とらんじすた・がーる

2010年10月9日00時09分発行